

エペソ人への手紙 3 : 8 (パウロ)

Preface

2週間ほど前に、同盟教団の牧師研修会に行ってきました。

そこで10年以上ぶりに、仲の良いある牧師先生と再会し、色々な話をすることが出来ました。

その間、お互い色々な事があって、その中でも苦しかったけれども、恵みだったことを分かち合いました。

そして、その分かち合った話の内容が、今読みました聖書箇所を一人で黙想していますと自然と思い出されてきて、私の中でこの御言葉と重なるような気がしました。

その牧師先生は、10数年間同じ教会で牧師として仕えていく中で、自分にとって誇りであり、プライドであり、能力だと思っていたものが、一つ一つそぎ落とされて行き、遂には「ああ、僕には何にもないなあ。無能だなあ」ということを実感させられた時間だったと、話してくれました。

自分なりに誇っていた学歴だったり、学歴から来る英語力だったり、自他ともに認める良い性格だったり、さらには仲のいい夫婦関係だったり、ご自分なりに誇っていたものが一つ一つそぎ落とされ、それらのものが何の誇りにもならないところへと、何にもならないところへと、何にも無いところへと導かれて行ったということを話してくださいました。

その話を聞いていて、私自身も全くもって同感でした。

「なんて無能なんだろう。なんでこうも出来ることが何一つないんだろう。なんでこんなにちっぽけなんだろう。やる気にさえなれば何でも出来ると思っていたあの自信満々だった思いはどこに行っちゃったんだろう」というようなところへと導かれ、今もそのように導かれていることを二人で分かち合いました。

そして、その話がここで終わってしまったら、ただの可哀そうな悲劇話でしかないかもしれませんが、全然全くもって悲劇話ではなく、二人で笑いあって感謝して、その話を終えることが出来ました。

どう笑い合って感謝して終えることが出来たかと言いますと、「でもね、そうなってみて初めて、恵みだなあと、すべてがイエス様の恵みだなあと、それしかないなあと思えるようになるんだよねえ」と、二人で「そう、そう」と納得しながら癒され、また頑張ろうと思えたんです。

「みんなイエス様の恵みに気付くために同じようなところを通らされている

んだ」と、同じ神様の、同じ御手が、同じように、それぞれの人に働いていて下さることを覚えることが出来ました。

以前、あるご年配のクリスチャンの方が私に、「牧師は大変よね。だって、みんなの気持ちを理解できるように、ぜ〜んぶ経験させられるんだから！」と仰って下さり、じんわりと励まされたことがあるのですが、この言葉も、その牧師先生と分かち合って、これまた、一緒にじんわりと励まされました。

Part One

今、使徒パウロは、全くもって無能で、ちっぽけで、何にもないところへと導かれ、遂には、「すべての聖徒の中で最も小さな私」と思ってしまうようなところへと導かれています。全然全くもって悲観的でもなければ、悲劇的でもありません。

むしろ、「この恵みが与えられた」と、「キリストの計り知れない富を知っただけでなく、それを宣べ伝える者とされている」と、喜んでいます。

「神によって与えられた恵みが恵みだと思えるようになった。今置かれている立場や身分や境遇や私自身の姿、私に与えられている人たち、それすべてが恵みだと思えるようになるどころへと導かれ、そして、その導かれて行ったところが、自分で自分のことを『最も小さな私だ』と思えるところだった」と、パウロは告白します。

以前も少しお話ししましたが、人は誰もが基本、自分で自分のことを大きく見せようと、見せたいと思ってしまう。

自分で自分のことを大きく見せるために、何気なく誇張したり、自然と嘘をついてしまうようなこともありますし、大きく見せるために箔をつけるように教えられ、何とか箔を付けようと懸命になったりもします。

人の付いている箔を見てその人を判断することもあれば、逆に自分に箔が無いと思った場合は落ち込むこともあります。

そして時には、開き直って、何でもいいからとりあえず箔のない自分を誇ってみようと誇ったりもしながら、何とかして自分を大きく見せようとしてしまうところが、誰にでもあります。

でも本当は、そんな自分に疲れているし、そんな世の価値基準に納得も行ってないけれども、そうせざるを得ないということに幻滅するような思いを、これまた誰もが抱いていることでしょう

それゆえに、パウロ先生の「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私」という告白には、そういったやせ我慢からの解放と自由がたんまりと込められているように感じます。

「私は全ての人の中で最も小さな者です。」

この告白には、良い意味での靈的脱力感、何とも言えない爽やかさを感じます。そこには、競争心もありません。妬みも無ければ、自分を正当化しようとするむやみやたらな批判や非難もありません。勝ち負けもありません。「なんて可哀そうな私なんだ」という自己憐憫もありません。

ただ、そこにあるのは、神の恵みだけです。キリストゆえに恵みだと思えてしまいます。

さらには、キリストにあるすべてのことが富だと思えてしまいます。どれほどに富だと思えてしまうかと言いますと、測り知れない富だと思えてしまいます。

エペソ書 3 : 8 にある「測り知れない」と訳されている言葉は、「理解するには程遠いほどに大きな」という意味の言葉で、新約聖書では、ローマ書の 11 : 33 にのみ使われています。

ローマ人への手紙 11 : 33 (パウロ)

「キリストにあってすべての人の中で最も小さな者です」という告白に必ずや伴ってくるのが、キリストに関わるすべてのことが深く、知り尽くしがたく、極めがたい程の富だと思えてしまうことです。

オリンピックで金メダルを獲ったある水泳選手の告白記事を読んだのですが、金メダルを獲ることによって、皆からも、そして自らも憧れていたありとあらゆる富と言われるものを手に入れたにもかかわらず、残ったのは虚脱感で、自らが何者なのかが分からなくなってしまい、精神的にダウンし、人生の目標や生きる意味を見出せなくなって、恐れに駆られたという内容でした。

「いやそれでもいいから、とりあえず、一度はそんな箔を付けてみて、同じような虚脱感を味わってみたいよ」とひねくれたことを思ってしまうのも私たちかもしれないが、でもそういう世の富の薄っぺらさに気付かされる人生経験は、私たちがまことの神様、主イエス様に出会うためには不可欠なのかもしれません。

深く、知り尽くしがたく、極めがたいキリストに関わるすべてのことは、廃れ、朽ち果て、死ぬ時に何一つ持って行くことの出来ない富のような顔をして踏み返りながら富と称しているちりあくたごみではありません。

神の国を受け継ぐという何をもってしても説明し尽くし難く、映像化することももちろん出来ず、言い表すことも出来ないほどの富です。

この富が富だと思えてしまう信仰が与えられることこそ人にとって最大の最高の幸いであるがために、このことを宣べ伝える者として命を懸けられることに、パウロ先生は喜び、感謝します。

そして、この喜びや感謝を覚えるために必要な必須条件と言いましょうか、恵みが、「最も小さな私に」と言える告白です。

Part Two

イエス様はかつて山上の垂訓で、「心の貧しい者は幸いです。なぜなら、天の御国はその人のものだからです」と仰いましたが、「最も小さな私」という言葉と「心の貧しい者」とは同義語です。

同じ意味です。

私の名前には、「豊和」、豊かという漢字が入りますが、小さい頃から豊かになりたいと思っていました。

まず金銭的に豊かになりたいと思っていたせいか、小さい頃の夢は、歌手か医者で、高校生の頃の夢は社長でした。

そして何よりも、心の無い金銭的に豊かな人にはなりたくないと思っていましたので、心の豊かな人になりたいと思っていました。

当時私の考える心の豊かな人とは、運動も出来て、勉強も出来て、誰とも分け隔てなく過ごすことが出来て、たとえ彼女が出来ても、彼女よりもそれまで仲の良かった友達を大事にするような人間で、ケチ臭くない人でした。

これが、私にとっての心の豊かな人でした。

なのに、なのにです。

クリスチャンになってから、マタイの福音書から聖書を読み始めてみますと、「心の貧しい者は幸いです」という分けの分からないイエス様の言葉が出てきました。

クリスチャンになる前は、「神なんか知らなくても、イエス・キリストなんか信じなくても、自分の力で十分に心の豊かな人になれる」と思っていましたが、実際にイエス様に出会ってクリスチャンになりますと、それまで感じたことのない心の豊かさと言いましょうか、心の充足感を感じました。

なのに、なのにです。

イエス様の最初の説教の第一声が、「心の貧しいものは幸いです」でした。

かなりの長い間、この言葉の意味が正直分かりませんでした。

神学校に入ってからそれなりに一生懸命に聖書を読み、この「心の貧しい者は幸いです」という御言葉についての説教や講義を聞くのですが、分かったようで良く分かりませんでした。

そうして、伝道師になり、牧師になり 22 年ぐらい経ちましたが、少し分かってくるようになってきた気がします。

「ああ、そうか！ 心の貧しい者とは、神様の前で正直に自分の罪深さ、汚さ、ずる賢さ、貪欲さ、嘘つきさ加減が止め処もないことを少しづつでも認められるようになって、人の罪深さ、汚さ、ずる賢さ、貪欲さ、嘘つきさに怒りを覚え、非難をすることから、少しづつでも、そうなってしまっている、そうならざるを得ないその人の痛みに共感できるようになることなんじゃないだろうか」と思えるように本当に微々たるものですが、ほんの少し分かるようになってきたような気がします。

つまり、縮めて言いますと、神の前ばかりか、人の前にあっても、自分の罪深さを認められる人こそ、心の貧しい人であり、最も小さな者だということです。

そして、そこにこそ、与えられている恵みが恵みに思え、キリストにあるすべてのことが測り知れない富だと実感出来、神の国を、天の御国を受け継ぐ者となるわけです。

すると、聖書の言葉が自分事のように迫って来ます。

礼拝で話される聖書の解き明かしが、私事として入ってくるようになります。

ちょっところ話が反れますが、神学校に入って神学を学び、説教者となっていく過程で持つようになってしまった最も高慢ちきな心持ちのうちの 하나가、それまでちゃんと聞こうとしていた礼拝説教が突如として、聞けなくなってしまうます。

もちろん、神の言葉として聞こうとするのですが、条件が付くようになってしまいます。

どんな条件かと言いますと、説教が上手いのか下手なのか、私の聞きたい話なのかそうではないのか、良く知りもしないくせして知った風に神学的にああだこうだというような条件です。

もちろん、そういうイタイところを通してこそ分かることもありますが、心が高ぶり、最も小さな者であることから、いつの間にか離れてしまうのです。

Part Three

この心の貧しい人、最も小さな人になるのは、私たちの力ではなれません。

もし、心の貧しい人、最も小さな人に、自分の力で成れてしまったら、もうその時点で、心の貧しい人でもなければ、最も小さな人でもありません。

主イエス様に導かれ、主イエス様が同行し、主イエス様がくびきを共に担って下さり、主イエス様のくびきを負いながら生かされて行った結果、恵みとして、私たちの心がそう思え、そう告白出来るようになることが、心の貧しい人であり、最も小さな人ですね。

無論、だからと言って、「おんぶに抱っこに何にもしてなくていい」ということではありません。

私たちに求められていることがあります。

それは、選択です。選び取るということですね。

では、どんな選択なのか？

今日も、主イエスとともに生きるという選択です。

今日も、主イエスの心が、私の心になるようにという選択です。

愛の関係には、必ず選択（選び取る）が伴います。

どんな愛の関係にも、その愛を持続させるためには選択をしなければなりません。

その愛が本当なのかどうかということを確認するためには、意志をもって選び取って行くんです。

約束したことを守るという事を選び取り、貞操を守るという事を選び取り、はたまた、何となく良く分からないけれども、愛したいという気持ちが湧いてくるというのも愛の気持ちかも知れませんが、その気持ちを選び取って行くという事をして、初めて会いが成り立ちます。

神との愛の関係には、導きと同時に、私たちのキリストへの選択が必要不可欠ですね。

ですが、もしキリストを愛することを選択できたからと言っても、私の誇りにはなりません。

誇る代わりに、「すべてが神の恵みだ」と、「すべてがキリストの導きだ」と告白するようになります。

人間の有限的な論理展開ではおかしな話ですが、100%神の恵みであり、導きであります。100%私の決心、私の決断、私の選択であります。

そして、この二つの100%が重なった時出てくる言葉が、「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私」という告白であり、遜りであり、キリストにある測り知れない富の実感であります。

Conclusion

今日はこの後、聖餐式が執り行われますが、主イエス様こそ、神であられるにもかかわらず、すべての者の中で最も小さな者となられたお方です。

聖餐式のパンとブドウ酒は、この最も小さくなられた主イエス様の御体と血潮を表すものですが、ある意味、このパンとブドウ酒を私たちが口に入れ、体内に入れるという行為は、「主イエスの心が私の心となりますように。主イエスのように最も小さな者となれますように」という願いに同意することでもあるでしょう。

そして、その同意には、恵みが恵みと思える恵みが伴い、キリストの測り知れない富が、確かに測り知れない富だと思える知恵と思慮が与えられるでしょう。

これから聖餐に与る際、「主イエスの心が私の心となりますように。主イエスのように最も小さな者となれますように」という祈り心を持ちながら、聖餐に与ればと願います。

そして、それゆえの富を味わえればと願います。
お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 3：8